東京・神楽坂と旅館「和可菜」

このところ東京に行って都庁で資料を入手したあと、地下鉄・大江戸線で神楽坂に行くことが多い。「坂と路地のまち」神楽坂の独特の雰囲気が気に入って、ぶらぶら散策するのが楽しみだ。

文庫本になった黒川鍾信『神楽坂ホン書き旅館』を手にして、初めて「和可菜」という旅館を知った。

本書は第 51 回日本エッセイスト・クラブ賞に輝き、じつに面白い。カバーには次のように紹介してある。「神楽坂の露地の奥にひっそりと佇む『和可菜』。この質素な旅館で『男はつらいよ』を初めとする脚本＝ホンの名作がいくつも書かれた。今井正、内田吐夢、山田洋次、深作欣二、浦山桐郎、早坂暁、市川森一、竹山洋ら、『和可菜』に集った当代一流の映画人と、彼らを温かく見守り続けた名おかみ・和田敏子。日本映画の黄金時代を支えた、小さくも強靭な砦の半世紀を描く、痛快無比の疾風録。」

神楽坂通りから、横丁を抜け迷路のような路地をすこし行くと、黒塀と格子戸の「和可菜」があった。まさに路地の奥の奥に静かに、ひっそりと佇むといった感じだ。この 2 階で山田洋次監督が寅さんの脚本を書き、今も仕事場にしている。山田監督は「日本アカデミー賞特別功労賞を差し上げようではないか！」と書いている。こんなところを仕事場にして原稿を書いてみたいものだ。

（2008 年 2 月 28 日　記）